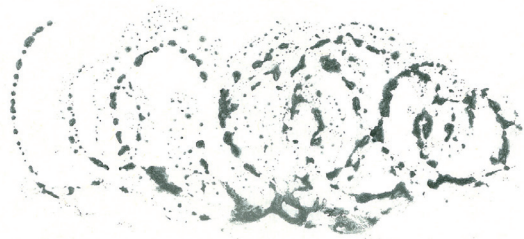


人事の哲学



人事の哲学

大転換期を支える中国古典の智

第十八話

ポストも処遇も頭打ち。グローバルシフトにも
適応しづらいミドルとしては、
組織内で自分をどうモチベートすればいいのか



田口佳史氏

Taguchi Yoshifumi_東洋思想研究者。株式会社イメージブラン代表取締役社長。老荘思想的経営論「タオ・マネジメント」を掲げ、これまで2000社にわたる企業を変革指導。また官公庁、地方自治体、教育機関などへの講演、講義も多く、1万人を超える社会人教育実績がある。最近の著書に『孫子の至言』(2012年光文社)、『リーダーの指針 東洋思考』(2011年かんき出版)、『老子の無言』(2011年光文社)、『論語の一言』(2010年 同)。2008年には日本の伝統である家庭教育再興のため「親子で学ぶ人間の基本」(DVD全12巻)を完成させた。

Text = 千葉 望

Photo = 鈴木慶子、新井啓太(書画)

昨年は東日本大震災という未曾有の災害が日本を襲い、外に目を転ずればEUの経済危機が大きな混乱を招いています。企業社会で働くミドルの方々も、先が見えないという思いでさまざまな悩みを抱えていることでしょう。なかにはリストラの対象になり、どうすべきか苦しんでいる方がいるかもしれません。今回は、個人ではどうにもできない転機を迎えた時の心構えを、東洋思想のなかに見出していこうと思います。

自省することから
始めよう

吾方に事を処せんとす。必ず先ず
心下に於て自ら数鍼を下し、然る後
事に従う。(『言志四録』)

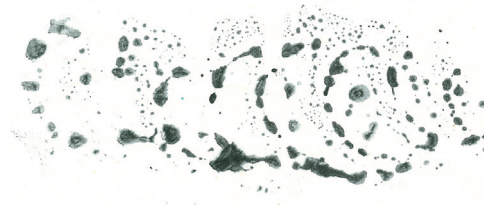
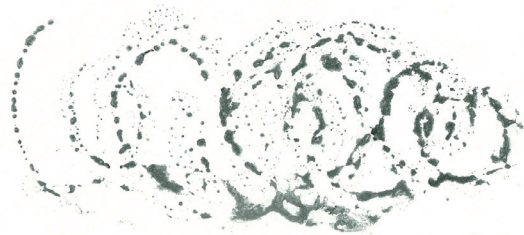
今後日本の企業社会のなかでは職務やポストの数が頭打ちになっていくことは、目に見えています。状況

が明らかにもかかわらず、厳しさにたじろぎ、翻弄されている人が多すぎます。あたふたするのではなく、まずは冷静に自分の今後を考えなくてはなりません。佐藤一斎が「先ず心下に於て自ら数鍼を下し」と書いているのは、「自分でみぞおちに鍼を打ち」、すなわち心を落ち着けよ、腹を据えろと言っているのです。

会社を2~3日休んで、自分を見つめ直す時間を持ってよいでしょう。今は何かにつけて自分で考える前に付和雷同し、浮き足立つ傾向が目立ちます。簡単に手に入る処方箋はありません。まず冷静になり、そののちに覚悟をきめることから始めたいものです。

子曰く、位無きことを患へずして、立つ所以を患へよ。己を知る莫きを患へずして、知る可きを爲さんことを求めよ。(『論語』)

『論語』のなかでも有名な一節です。



「位＝地位」のないことをくよくよするのではなく、なぜそうなったかを考えよと孔子は言います。彼の時代と現代と本質的に変わらない証拠に、よく居酒屋などで「自分は実力があるのに、なぜ認めてもらえないのか？ 上司に見る目がないからだ」と愚痴るサラリーマンを見かけます。本当にそうでしょうか。十中八九、認められない理由はその人に実力がない、あるいは人格に不足があり部下を預けられないなどだからなのです。

自分の力が足りないことを自覚しなければ、次のステップには進めません。そのうえで、イヤだと言っても買われてしまうような能力や人格を持つことです。事実、転職を希望していないのにスカウトの声がかかる人はたくさんいます。状況に不満があっても他人のせいにするのではなく、「自責」で考える。どういう世の中になっても生きていけるように、実力をつけることが重要です。

士は当に己れに在る者を待むべし。動天驚地極大の事業も、亦都べて一己より締造す。(以下『言志四録』)

経済が好調で会社が成長していれば、実力が伴わない社員でもまずは安泰。高度成長期などに多く見られ

た事例です。ポストは増え続け、給料も右肩上がり。こういうときにはモノを考えなくても済みました。しかし今は違います。それは果たして不幸なことなのでしょうか。どこまでも環境や処遇に助けられて生きるのがよいか、それとも自分のなかに備わっているもの^{たの}を頼りにするのがよいか。私はほかを頼ってばかりいる人生は情けないと考えています。

佐藤一斎は、胆をつぶすほどの大きな事業もすべて1人の人間から出発するのだと言っています。坂本龍馬は組織にぶら下がっていたでしょうか？ 組織にぶら下がりて生きる時代は終わってしまったのです。何があっても自分で食べていくのだ、自分自身の人生を生きるのだという考え方をしなければなりません。

自己の確立は 一生のわざ

間思雑慮の紛紛擾擾たるは、外物之を溷すに由るなり。常に志気をして劍の如くにして、一切の外誘を駆除し、敢て肚裏に襲い近づかざらしめば、自ら浄潔快豁なるを覚えむ。

現代人の多くは外面主義、人の評価ばかり気にする傾向があります。

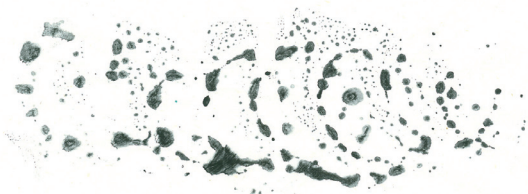
困ったことに現代は大変な情報化社会。意識せずともたくさんの情報が流れ込み、個人としての判断を左右しています。ヒマだとさらにいけません。下らない考えに取りつかれてしまいます。外側から入ってくる情報が心を乱す大きな原因なのです。

そういう情報はできるかぎりシャットアウトして、自分の志気を剣のように鋭くとがらせ、人がなんと云おうと気にせず、自己の満足を求めて生きればよい。外憂を近づかせず、惑わされないことが大事です。そうしていれば清らかで明朗快活な気持ちでいられます。

他人に惑わされないためには自己を確立しなければいけません。外側の一切を冷静に、かつ客観的に見る。それは自分の内面を深く見つめることから始まります。自己の確立した人は「志」ひとつで生きているもの。坂本龍馬や吉田松陰は、若くしてそれができていた人々でした。

己れを喪えば斯に人を喪う。人を喪えば斯に物を喪う。

自分を失い、自分よりも他人の評価を気にする人はたくさんいるもの。しかしそういう価値観の持ち主は魅力がないので、結局は友人を失っていきます。友人を失えば金や財産が



己

自己が確立すれば他人に惑わされない。
「志」ひとつで生きていける。

あろうとも、無意味な人生になってしまわず。しかし定年退職後、友人を失ってしまう人のなんと多いことでしょうか。老後問題の大根は年金ではなく、自分自身にあります。自己を失わずに生き、夢や志を持っている人の周りにはいつでも人が集まります。

士は独立自信を貴ぶ。熱に依り炎に附くの念起すべからず。

権力や金持ちにすり寄って生きようと思っはいけない、自分をため、と一斎は言います。現代のビジネスパーソンに置き換えれば、会社を頼るなということです。企業も今後は会社にぶら下がる人間を少なくし、自立できる社員を多く作っていかなくてはなりません。

年齢を重ね、ミドルと呼ばれるようになったとき、自己を確立していない人や自分を鍛えようとしていない人は組織のなかで必要とされません。いつも自分に問いかけてみてください。「自分は何かプロフェッショナルと呼ばれるものを持っているか?」「自信のある技術や技能を持っているか?」。ないと思ったら今からでも習得を始めてください。

子曰く、不仁者は以て久しく約に

處る可からず。以て長く樂に處る可からず。仁者は仁に安んじ、知者は仁を利す。(『論語』)

人格者ではない人間は、長く逆境にいてはいけない。なぜなら、逆境に耐えてチャンスを窺うことができず、悪事を働き身の破滅を招くからです。かといって、順境にも長くいられない。なぜなら、すぐに傲慢になり、奢侈に走るからです。そうならないために自分の人格を磨かなくてはなりません。

立派な人は心のありようを常に考え、自分がどうあるべきかを知って居場所を決めることができます。また、周りに対する思いやりを持ちながら、自己を磨いていくものです。

孔子も努力して
自己を創り上げた

子曰く、我は生れながらにして之を知る者に非ず。古を好み、敏にして以て之を求めたる者なり。(『論語』)

孔子は、生まれながらにして真実を知るものではありませんでした。古典を好み、学び続け、求め続けて「孔子」という人格を創り上げまし

た。ここでいう「敏」とは、学ぶことをおっくうがらないという意味です。若かった孔子には、努力し続ける力が備わっていました。

もともとの彼は天才でも聖人でもありませんでした。20代までは家が貧しく、満足に学ぶ環境がありませんでしたから学力も足りなかったほどです。孔子でさえそうだったので。普通の人間である私たちは、もっと古典に学び続けなければなりません。

子は釣りして綱せず。弋して宿を射ず。(『論語』)

孔子は一本釣りで魚は釣りましたが、綱をかけることはしませんでした。また、飛んでいる鳥を弓矢で射ることはしましたが、ねぐらで休んでいる鳥を射ることはしませんでした。つまり、安易な道を選ばなかったということ。一挙に成果を得ようとしてはなりません。確実に一歩一歩、進んでいくことが大事です。

自己を確立することは一生の問題です。中国古典が素晴らしいのは、「聖人君子に向けて歩み出したか?」と問いはしても、「聖人君子になったか?」とは問わないことです。日々努力することに意味があります。



己という字の字源は、糸を並べた様や糸巻ききの形で、そこから転じて、「始まり」を表すそうです。生まれてから死ぬまでいろいろなことが起きますが、一つひとつ向き合っていくうちに最後には自分なりの美しい形が出来上がる。そうした「人生」をイメージし、書にしました（一舛氏・談）

およ 凡そ遭う所の患難^{かんなんへんこ}变故、屈辱^{くつじやく}讒^{ざんぼう}諂^{たん}、
 弘逆^{ふつぎやく}の事は、皆天^{わがさい}の吾才^{ごさい}を老せしむ
 る所以にして砥礪^{しれい}切瑩^{せつえい}の地に非ざる
 は莫し。君子は当に之に処する所以
 を慮^{おもんばか}るべし。徒らに之を免れんと
 欲するは不可なり。（『言志四録』）

会社のなかでは讒言や誹謗など、苦しいことはたくさんあります。そういう事態になったとき、「天は自分を苦しめようと思ってこのような艱難辛苦を与えるのではない、自分を成熟させるために与えたのだ」と考えてほしいのです。どのようなことでも、自分を磨くために役立つことはない。天が期待しているから、自分にこのような苦しみを与えたのだと思ってください。

君子は艱難辛苦に出合った際、「これをどのように役立てれば自分を鍛

え、人格を磨けるのか」と考えます。「自分には嫌なこと、困ったことが降りかかりませんように」と神仏に祈るようではいけません。艱難辛苦よ来い！と言える自分を作る。そうすれば嫌なことはなくなるものです。

何かあったとき、茫然自失の状態になるのがいちばん怖い。逃げ道がなく、判断もできない。そういう状況で何かやってもよいことはありません。もっとも、東日本大震災で家や家族を失ったような方は別です。時が心を落ち着かせてくれるまで待つことも必要です。

それに比べれば、ビジネスでの苦労は苦労とも言えないはず。沈着冷静になって、自分がどのような人生を歩んでいきたいのか、じっくりと考えることから始めてください。

書・題字 = 岡一舛

Oka Issou_国内外で活躍中の現代書家。「絵のような書」を模索し独自の創作活動を行っている。パリ国際サロン創立会員、毎日書道展会員。現代書展（大澤賞）、スペイン美術賞展（優秀賞）、日本・フランス・中国現代美術世界展（中国美術家協会賞）、イタリア美術賞展（優秀賞・プレスキッド賞）、パリ国際サロン（最高賞・ザッキ賞）、サロン・ドートンヌ展（入選）ほか、国内外受賞実績多数。
<http://www.issouart.com/>